

『宝物集』私解 (九)

——三世諸仏・釈迦關係記事の考証 (その1) ——

山下哲郎

前稿(一)『宝物集』私解(八)——出家遁世説話記事の考証(その五)——本誌第二十七号 平成十一年八月)に引き続き第二種七巻本の吉川本第四の記事の考証を行う。本節より極楽へ赴くための十二門開示の第二、「ふかく三宝を信じたてまつりて仏になるべし」の条に入る(『岩波新日本古典文学大系 四〇』一六八頁)。前稿までと同じく、岩波新大系の底本の吉川泰雄氏蔵本(吉川本)の原本を底本とし、「本文」〔校異〕を掲げた上で、考証を加える。本稿において参照(引用)した諸本も従来通り。

三世諸仏・釈迦關係記事私解

(十二門論の二、「ふかく三宝を信じたてまつりて仏になるべし」岩波新大系一六八頁10行目〜一七〇頁11行目)

〔本文〕

① 第二にふかく三宝を信じたてまつりて仏になるべしと申は信心をつよくすべきといふ心也 ② 三世の諸仏はみな仏宝僧のちからによるがゆへに道をえたまへり ③ 弥陀は空王仏を拜して仏道をなり釈迦は法花経をつとめて正覚をなり給ふ ④ 地藏菩薩の地

こくの衆生をみちびき給ふ僧のちからにあらすや ⑤ このゆへに三宝を信じて仏道をなり給ふべしとは申侍るなり ⑥ あのくぼだい信心を因とすと涅槃経にもとき給へば信心をいたして淨土をもとめ給ふべきなり ⑦ 教主釈尊、一切衆生をあはれみて父の子をおもふがごとくにはごとくみ給ふ ⑧ 今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是吾子といふ文たがふ事なきもの也 ⑨ はやく釈尊をちゝのごとくたのみたてまつりて無上ほだいをいのり給ふべき也 ⑩ 須達が祇園精舎をつくりたてまつりしをもよろこび給はず ⑪ 提婆達多が仏身よりちをあやしをもうらみたまはず ⑫ 阿闍世王のちゝをころしゝをもうとみ給はず ⑬ 阿育王の八万四千の后をころしゝをもにくみ給はず ⑭ うばり尊者が持戒なりし善星比丘が破戒なりし迦葉尊者が威儀をととのへし六軍比丘が威儀わすれたる舍利弗が智慧にとめし周梨はんどくが鈍根なりしおなじく仏道に入て差別弗が智慧にとめし周梨はんどくが鈍根なりしおなじく仏道ほしめし悪の衆生をば善星比丘のやうにみたまふ ⑮ 善の衆生をば羅睺羅のやうにお聖王をもうやまひたまはず 田夫野叟をもあざむきたまはず ⑯ 我観一切、普皆平等と法花経にのべたまへるは是なり ⑰ はやく善根を修して羅睺羅のやうにおもはれたてまつりて仏道を得給

ふべき也 ⑨譬喻經とき給ひしとき青蓮の御まなこよりなみだをながして七日までなきたまひけるを御弟子たちあやしみてとひたてまつりければ道心なき衆生の事をかなしむなりとぞのたまひける

⑩五百の大ぐはんもみらいの衆生のため僧祇の苦行も濁世のわれらがためなりはやく父のおもひをなしてなをく仏道をならんとおもふべき也

〔校異〕

①(一)第二誓願ヲオコシテ佛ニナルヘシト申ハ三世諸佛之正覺ヲナリ給コトハミナ四弘誓願ニヨルナリ又佛ニヲノく誓願アリ少々申侍ルヘシ (九)第二にふかく三宝を信じたてまつりて仏になるべしと申は信心をつよくすべきといふ事也 (八) (久) (身壽) 第二深三寶を信したてまつりて佛になるへしと申ハ (片三) (元) ○第二深ク三寶ヲ信シ奉テ可成佛ト申ハ (元) 「佛ニ成ベシト申ス」 (平古) 第二に三宝を信して仏になるへしと申ハ (二) 第二にふかく三ぼうをしんじてほとけになるべしと申は (二) 2~19なし。 (九) 三世の諸仏の(以下同。)

(久) 三世ノ諸佛ハ佛法僧ノ力ニ依カ故ニ道ヲ得給ヘリ (片三) (元) 三世ノ諸佛ハ皆佛法僧ノ力ニヨルカ故ニ道ヲへ給リ (元) 「皆三寶ヲ信ジテ道ヲ得給フガ故也三寶ト申スハ佛法僧ノ三ツ也」 (平古) (平古) 諸佛ハみな三寶をしんじて道を行なふ (平古) 「え給ふ」 かゆへなり三寶と申ハ佛法僧の三つなり仏にたのみをかけた成佛すへきむねをおろく申へし (二) 諸佛はみな三ぼうをしんじてだうを多給へるゆへなり三ぼうと申はぶつぼうそうの三つなりほとけにたのみをかけたてまつりてじやうぶつすべきむねをおろ

く申すべし ③(久) ③(元) ⑤なし。 (平古) (二) ③(元) ⑦なし。 (八) (瑞) (九) (身壽) 弥陀ハ空王佛を拜して・佛道ヲなり・釈迦ハ法花經ヲつとめて正覺をなり。 (片三) (元) 弥陀ハ空王佛ヲ拜テ佛ニナレリ釈迦ハ法華經ヲ勤テ正覺ヲナセリ

④(身壽) 地藏菩薩ノ地獄ノ衆生ヲ導給法ノ力ニアラスヤ (片三) (元) 地藏ハ地獄ノ衆生ヲ導キ給僧ノ力ニアラスヤ ⑤(八) このゆへに三寶を信して佛道をいのり給へしとは申侍るなり。 (身壽) (片三) (元) 此故ニ三寶ヲ信佛道ヲ祈玉フヘシ ⑥(八) 阿耨菩提ハ信心を因とすと涅槃經ニも申たれハ信をいたして浄土をもとめ給へきなり (久) 阿耨菩提ハ信心ヲ因トス涅槃經ニモ説タメレハ致テ浄土ヲ求給ヘキ也 (身壽) 阿耨菩提ハ信心ヲカカシト涅槃經ニモ申メレハ信ヲ致テ浄土ヲ求給ヘキ也 (片三) (元) 阿耨菩提ハ信心ヲ因トスト涅槃經ニモ説タレハ信ヲ致テ浄土ヲ求給ヘキナリ白紙ヲ本尊ト頼メハ眼開キ河ノ水ヲ香水ト信レハ髮色替ル況ヤ三寶ヲ信シテ佛道ヲ願ハン人ハ佛ニ可成事不可有疑 (元) 「佛ニ成ベキ事疑ヒアルベカラズ」 ⑦(八) 教主釈尊・一切の衆生をあはれみて・父の子をおもふかことくにはくみ給。 (久) ○教主釈尊ハ一切衆生ヲ哀テ父ノ子ヲ思フカ如クニ育マ (身壽) 教主釈尊ハ一切衆生ヲ哀テ父ノ子ヲ思フカ如クニ給 (片三) (元) 教主釈尊ハ一切衆生ヲ慈テ父ノ子ヲ思フカ如クニ (如クニ) ハコクミ給ナリ ⑧(久) 云今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子ト云文遣フ事無物也 (身壽) 今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子此文ヲカウ事无ッ (片三) (元) 法華經 (元) 「一」 文ニ云今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子ト云文遣キ者ナリ (元) 今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子ト云文違事ナキ者ナリ (平古) (平古) 法華

経には 今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子とのへ給ふ(平古)「なり」(二)ほけきやうにはこんし三がいかいぜがうごちゅうしゆじやうしつぜうしとのべたまふなり此もんの心は三がいのしゆじやうはみなわがこなりとときたまへるは(上野本・松井本)「ときたまへば」。(三)⑨(久)早ク尺尊ノ父ヲ思テ惣無上菩提ヲ祈給ヘキ也(身尊) 早尺尊ヲ父ノ如ニ憑タテツリテ無上菩提ヲ祈玉フヘキ也(片三) (元) 早ク釈尊ヲ父ノ如ク思奉頼テ(元)「頼奉ツリテ」無上菩提ヲ祈給フヘキナリ(平三) (平古) されははやく(平古) 以上なし。(父のことに思ひ奉てたのみをかけ奉らうたかひなく仏になり給ふへき也(二)ちのごとくに思ひたてまつりて一切の(上野本)「の」なし。)しゆじやうたのみをかけたてまつらばうたがひなくほとけになり給ふべきなり(三) (平古) (二)⑩⑪なし。(最) (久) 須達か祇洹精舎をつくりてたてまつりしをもよるこひ給はず。(久) 提婆達多カ仏身ヨリ血アヤイシヲモ憎ミ給ハス(身尊) 提婆ヲ佛身ヨリアヤシヲモ恨給ス(片三) (元) 提婆達多カ佛ノ身ヨリ血アヤシヲモ惡ミ給ハス(久) (身尊) (片三) (元) なし。(最) 阿闍世王の父をころしをもうらみ給はず(久) (片三) (元) 阿育大王ノ八万四千ノ后ヲ殺セシヲモ恨ミ給ハス(身尊) 阿育王ノ八万四千ノ后ヲ害セシヲモニクミ給ス(久) (最) うはり尊者か持戒なりし・善星比丘か破戒なりし・かせう尊者か威儀をとのへし・六軍比丘か威儀をわすれたる・舍利弗尊者か智恵二とめし・周利般特か鈍根なりし・同・佛道ニいれて差別あることなかりき(久) 優婆離尊者力持戒ナリシ善星比丘力破戒ナリシ迦葉尊者力威儀ヲ調ヘシ六軍比丘力威儀ヲ忘レタル舍利弗尊者カ智恵ニ富メリシ周利般特

カ鈍根ナリシヲ同仏道ニ入テ差別有事無キ(身尊) 優婆離尊者力持戒ナリシ善星比丘力破戒ナリシ迦葉尊者カ威儀ヲ調シ六軍比丘力威儀ヲ忘タル舍利弗尊者カ智恵ニ富シ修離般独力鈍根ナリシ同佛道ニ入テ差別有事ナシ(片三) (元) 優婆離尊者力持戒ナリシ善星比丘力破戒ナリシ迦葉尊者ノ威儀ヲ調六軍比丘力威儀ヲ忘(元) (忌) タル舍利弗尊者ノ(元)「カ」智恵ニ富(元)「富リシ」周利般特カ鈍根ナリシヲモ皆同ク佛道ニ入テ差別有事ナカリキ(最) 善の衆生をは羅睺羅のやうにおほし惡の衆生をは善星比丘のやうに見給(久) 善ノ衆生ヲハ羅睺羅ノ様ニ思召惡ノ衆生ヲハ善星比丘ノ様ニ見給(片三) (元) 善ノ衆生ヲハ羅睺羅ノ如ニ思召シ惡ノ衆生ヲハ善星比丘ノ様ニ見給(二)「給ヒ」(諸本同。⑰(最) 我観一切普皆平等と法華經にの給ハこれなり。(久) 我観一切普皆平等と法花經ニ言給ヘルナリ(身尊) 我観一切普皆平等と法華經ニ説玉フハ是也(片三) (元) 我観一切普皆平等(元)「我観一切普皆平等」(法華經ニ説給ルハ是ナリ(最) (身尊) はやく善根を修して羅睺羅のやうにおもはれたてまつりて佛道をなり給へし。(久) 早ク善根ヲ修シテ羅睺羅ノ様ニ思ハレ奉テ佛道ヲへ(元)「得」給へし修羅睺羅ノ様ニ思レ奉リテ佛道ナリ給ヘキ也(片三) (元) 早ク善根ヲ修シテ羅睺羅ノ様ニ思ハレ奉テ佛道ヲへ(元)「得」給へし(最) 譬諭經とき給し時青蓮の御眼よりなみたをなかし七日までなき給けるを御弟子と人のあやしみてとひたてまつりけれハ道心なき衆生のことかなしむなりとそゝの給ける(久)〇譬諭經ニ説云時青蓮ノ御眼ヨリ涙ヲナカシテ七日マテ啼給ケルヲ御弟子共ノアヤシミテ奉レ問ケレハ道心無衆生ノ事ヲ悲ムナリトソ言ケル(片三) (元) 譬諭經ヲ説給し時青蓮花ノ御眼ヨリ涙ヲ流シテ

(一) (元) 「流シ」(七) 七日迄泣給ケルヲ御弟子達佐テ奉問 (二) (元) 「問奉リ」(ケ)レハ道心ナキ衆生ノ事ヲ悲ムナリトソ被仰ケル (平三) (平古) 又譬喩經をとき給ひし時青蓮華の御まなこより泪をなかし七日までなき給ふ御弟子たちあやしみてとひ奉られければ道心なき衆生の事をかなしむなりと(平古)「そ」仰られける (二) (二) 又ひゆきやうをときたまひしときは七日のあひだしやうれんじひの御まなこよりくれなゐのなみだをながしたまひてまつだいのしゆじやうのだうしんなき事をかなしみたまひし(以下(二)の独自文) こんじやうのおや(松井本)「あや」。(は)ただ二世のちぎりばかりなりおやはこをおもひ子は親をおもふといへどもたゞ夢まぼろしのあひだの事(上野本・松井本)「事也」。(さ)らに後の世に二たびみゆる事なしされば(松井本)「されば」なし。(大)しやうせそんにちゝのごとく(上野本)「ごとくに」。(た)のみをか)けたてまつらばかならずのちの世をすくい給ふおやをもつべき物なり (二) (二) 又佛ニヲノく誓願アリ少々申侍ルヘシ尺迦ニ五百之願ヲハシマス弥陀四十八ノ願立給フ (九) 五百の大ぐはんもみくいの衆生のため(以下同じ。) (愚) 五百の大願も・未來の衆生のため・僧祇苦行も濁世のわれらかためなり・はやく・父のおもひをなして・なを佛道をならむと・申へきなり (久) 五百の大願も未來ノ衆生ノタメ僧祇ノ苦行も濁世ノ我等ヲ為アリ早ク父ノ思ヲナシテ猶々仏道ヲナラント申ヘキナリ (身尊) 五百大願も未來ノ衆生ノ為也僧祇ノ苦行も濁世ノ我等ヲ為也早父ノ思ヲナシテ猶々佛道ヲ成ント思玉フヘキ也 (片三) (元) 五百ノ大願も未來ノ衆生ノタメ僧祇ノ苦行も濁世ノ我等カタメナリ早ク父ノ思ヲナシテ尚く道(二) (元) 「此道」ヲナラント申給ヘキナリ (二) (元) 「心ニコメ給

ベキ也」(平三) (平古) 五百の大願も未來の衆生のためなれははやく父の思ひをなしてなをく此みち(平古)「を」(心にし(平古)「こ」)め給ふへし (二) (二) そうきのくやう(上野本)「そうぎのぎやう」。(も)五百の大ぐはんも我らしゆじやうのためなり(以下(二)の独自文)しかるにいま見仏開法の結縁をするもたれが(松井本)「たが」。(ち)からぞやひとへに大おんけうしゆしやか如来の御ひぐはんなりこの御をしへにあづからずばみやうよりみやうにいるといひてりんゑすべし(上野本・松井本)「りんゑすべし」なし。「くらきよりくらき道にまとひて六道にちりんすべし」このころをいづみ式部(松井本・上野本)「が」(よ)める くらきよりくらき道にやいりなましはるかにてらせ山のはのつき はやくずいきてわうじやうごくらくをいのりてほとけになり給ふべし

【考証】

本節より、極楽へ赴くための十二門開示の第二、「ふかく三宝を信じたてまつりて仏になるべし」の条に入る。

以下、A〜Iに吉川本の記事を列挙し、さらに諸本の記事対照表を掲げておく。

- A [本文] ① ② 三宝を信ずべき事。三世諸仏、三宝の力で道を得し事。
- B [本文] ③ ④ 弥陀・釈尊の正覚。地藏の衆生済度。
- C [本文] ⑤ 三宝を信じ仏道を成すべき事。
- D [本文] ⑥ 涅槃經の文。
- E [本文] ⑦ 釈尊の慈悲。

- F (本文) ⑧ 法華經譬喻品の文。
 G (本文) ⑨ 積尊を頼み、菩提を祈るべき事。
 H (本文) ⑩ 積尊、須達の祇園精舎建立を喜ばず。
 I (本文) ⑪ 積尊、提婆達多の仏身を害する事を恨まず。
 J (本文) ⑫ 積尊、阿闍世王の父を殺す事を憎まず。
 K (本文) ⑬ 積尊、阿育王の八万四千の后を殺す事を憎まず。
 L (本文) ⑭ 積尊、優婆離尊者・善星比丘・迦葉尊者・六軍比丘・舍利弗・周梨般特を差別せず。
 M (本文) ⑮ 積尊の差別無き事。羅睺羅・善星比丘の例え。
 N (本文) ⑯ 積尊の差別無き事。金輪聖王・田夫野叟の例え。
 O (本文) ⑰ 法華經粟草喩品の文。
 P (本文) ⑱ 善根を修し仏道を得べき事。
 Q (本文) ⑲ 仏、譬喩経を説きし時、七日間衆生の事を泣き悲しむ。
 R (本文) ⑳ 仏の五百大願・僧祇苦行の事。積尊を頼むべき事。

《諸本記事対照表》 (○は該当記事がある、△は記事はあるが内容が他本と異なる、×は記事のないことをそれぞれ示す。)

R	Q	P	O	N	M	L	K	J	I	H	G	F	E	D	C	B	A		
⑳	⑲	⑱	⑰	⑯	⑮	⑭	⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	③	②	①	
△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△	本	一 卷
△	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×	×	△	本	二 卷
○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×	×	○	平仮名古活字	三 卷
○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×	×	○	二 卷本平仮名活字	三 卷本
○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	片仮名古身延文庫蔵
○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×	○	中 卷 等 本
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	久遠寺本
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	(按書本)
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	瑞光寺本
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	九册本
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	寺 本
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	吉川本
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	本

本節で特に注意されるのは二巻本で、右表のように記事内容は平仮名三巻本（古活字・整版本）と同様であるが、**〔校異〕**①⑩⑪に示したごとく、独自異文が多くみられる。また、本節において一巻本は特に記事が少なく、諸本にみられる釈迦関係記事が存在しない。以下、本節の記事の考証に入る。

〔本文〕③、「弥陀は空王仏と（最）等の「を」が正しい。**〔校異〕**③参照。）拜して仏道をなり」の一句は、『観仏三昧経』（『大正新脩大藏経』巻十五・六八九C）第九、本行品第八の「時會大衆見十方仏。及諸菩薩国土大小。如明鏡見衆色像。財首菩薩所散之華。当文珠上即变化成四柱宝台。於其台内四世尊。放身光明儼然而坐。東方阿閼。南方宝相。西方無量寿。北方微妙声。時四世尊以金蓮華散釈迦仏。（中略）坐釈迦仏床讚言。善哉善哉。釈迦牟尼。乃能為於未來之世濁惡衆生。說三世仏白毫光相。令諸衆生得滅罪咎。所以者何。我念昔曾空王仏出家学道。」の一節を典拠とするが、新大系脚注（一六五頁）に指摘されるように、『往生要集』大文五の五にみえる「過去空王仏、眉間白毫相、弥陀尊礼敬、滅罪今得仏」の句が『宝物集』の直接の典拠であろう。空王仏とは、空劫初成の仏（過去莊嚴最初の仏）で、威音王仏ともいう。『法華経』常不軽菩薩品に説かれ、無量無辺の極遠にたとえる。『栄花物語』巻十八「たまのうてな」にも『往生要集』の一節を引用したと思しき一文がある。

「こととは、こゑよき僧どもの過去空王仏、眉間白毫相、弥陀尊礼拜、滅罪今得仏と申したり。いみじうたうとくおもしろし。」（岩波日本古典文学大系）とみえる。また、同じく**〔本文〕**③の「釈迦は、法花経をつとめて正覚をなり給ふへし」の一句は、これも新大系脚注（同）に指摘があるが、『法華経』化城喻品（『大正新脩大

藏経』第九卷・二五a-c）に大通智勝仏の十六人の王子が十方に赴き、『法華経』を説いたという記事があり、十六番目の王子である釈迦が娑婆世界で『法華経』を説き、成仏したという。此所を踏まえたものと思われる。以下に該当部を引いておく。

爾時大通智勝如來。受十方諸梵天王及十六王子請。即時三轉十二行法輪。（中略）爾時十六王子。皆以童子出家而爲沙彌。諸根通利智慧明了。（中略）爾時轉輪聖王所將衆中八萬億人。見十六王子出家。亦求出家王即聽許。爾時彼佛受沙彌請。過二萬劫已。乃於四衆之中。說是大乘經。名妙法蓮華教菩薩法佛所護念。說是經已。十六沙彌。爲阿耨多羅三藐三菩提故。皆共受持諷誦通利。說是經時。十六菩薩沙彌皆悉信受。聲聞衆中亦有信解。其餘衆生千萬億種皆生疑惑。佛說是經。於八千劫未曾休廢。說此經已即入靜室。住於禪定八萬四千劫。是時十六菩薩沙彌。知佛入室寂然禪定。各昇法座。亦於八萬四千劫。爲四部衆廣說分別妙法華經。一一皆度六百萬億那由他恆河沙等衆生示教利喜。令發阿耨多羅三藐三菩提心。大通智勝佛。過八萬四千劫已。從三昧起。徃詣法座安詳而坐。普告大衆。是十六菩薩沙彌。甚爲希有。諸根通利智慧明了。已曾供養無量千萬億數諸佛。於諸佛所常修梵行。受持佛智開示衆生令入其中。汝等皆當數數親近而供養之。所以者何。若聲聞辟支佛及諸菩薩。能信是十六菩薩所說經法。受持不毀者。是人皆當得阿耨多羅三藐三菩提如來之慧。佛告諸比丘。是十六菩薩常樂說是妙法蓮華經。一一菩薩所化六百萬億那由他恆河沙等衆生。世世所生與菩薩俱。從其闍法悉皆信解。以此因緣。得值四百萬億諸佛世尊。于今不盡。諸比丘。我今語汝。彼佛弟子十六沙彌。今皆得阿耨多羅三藐三菩提。於十方國土。現在說

法有無量百千萬億菩薩聲聞。以爲眷屬。其二沙彌東方作佛。一名阿閼在歡喜國。二名須彌頂。東南方二佛。一名師子音。二名師子相。南方二佛。一名虛空住。二名常滅。西南方二佛。一名帝相。二名梵相。西方二佛。一名阿彌陀。二名度一切世間苦惱。西北方二佛。一名多摩。羅跋耆檀香神通。二名須彌相。北方二佛。一名雲自在。二名雲自在往。東北方佛名壞一切世間怖畏。第十六我釋迦牟尼佛。於娑婆國土。成阿耨多羅三藐三菩提。

〔本文〕⑥の『涅槃經』の引文、「阿耨菩提は信心を因とす」は、『大涅槃經』（南本）卷三十、獅子吼品（『大正新脩大藏經』第十二卷・二五 a c。北本卷三十二の文も同じ。）「大慈大悲名佛性」。佛性者名爲如来。大喜大捨者名爲佛性。何以故。菩薩摩訶薩若不_レ能_レ捨二十五有。即不_レ能_レ得阿耨多羅三藐三菩提。以_二諸衆生必當_レ得_レ故。是故說言一切衆生悉有佛性。大喜大捨者即是佛性。佛性者即是如来。佛性者即是如来。佛性者名爲大信心。何以故。以_二信心_一故菩薩摩訶薩則能具足檀波羅蜜乃至般若波羅蜜。一切衆生必定當_レ得_二大信心_一故。是故說言一切衆生悉有佛性。大信心者即佛性。佛性者即是如来。」の二節が典拠とされるが、これも『往生要集』大文五の二に「涅槃經云。阿耨菩提信心為因」の句があり、『宝物集』はこれを引いたものと思われる。（新大系脚注一六八頁。）

〔本文〕⑧の『法華經』の引文は、同經譬喻品（『大正新脩大藏經』第九卷・二四 c。）にみえる「今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子」の句を引いている。

〔本文〕⑩より⑬までは、釈尊の慈悲平等を説く例証としての句

が続く。善を行った者も悪を行った者も等しく仏道に入れたとする。以下、善悪の例が列記される。〔本文〕⑩、須達の祇園精舎建立については、『大般涅槃經』卷二十九（南本）・『法苑珠林』卷五十六・『経律異相』卷三十五等に説かれている。『今昔物語集』卷一―三十一話・『私聚百因縁集』卷三―三話・等、わが国の諸書にも説話が散見する。須達は舍衛国の長者で、給孤独長者ともいう。釈尊のために祇園精舎を建立寄進した。〔本文〕⑪、提婆達多が仏身を傷つけ血を流したことについては、典拠が特定できない。提婆達多は釈尊成道後に出家して弟子となつたが、釈尊と争ひ敵対することが多かつた。三逆罪のために生きながら無間地獄に墮ちたが、後に成仏することを得た（『法華經』提婆達多品）。例えば、『今昔物語集』卷五―十話（『賢愚經』卷一・『経律異相』卷二十五等を典拠とする。）に、提婆達多が昔仙人であつた時、今の釈迦である

国王を針で刺した話がみえる（『三国伝記』卷一―四話にもあり。）が、流血のことはみえていない。〔本文〕⑫、阿闍世王が父を殺した事については、『宝物集』では卷一の宝論に詳しい話が載せられている（新大系三十五頁）。阿闍世は摩訶陀国の太子で、父の頻婆沙羅王を獄死させ、父を助けようとした母をも殺そうとした。『観無量寿經』を典拠とする話で、『法苑珠林』卷四十九・『今昔物語集』卷三―二十八話・『三国伝記』卷七―六話・『私聚百因縁集』卷二―三話・『打開集』『法華經直談抄』卷第二本―四十四話等にもみえる。『観無量寿經』等では、阿闍世をそのかした者は提婆達多であつたとしている。なお、〔本文〕⑬は本節の一連の記事としては第二種七卷本（久遠寺本なし）のみにみえる記事である。〔本文〕⑭、阿育王が八万四千の后を殺した事は、『大阿育王經』『法

苑珠林』卷三十七・『経律異相』卷六等を典拠とする話。『今昔物語集』卷四一三話等にみえる。『宝物集』では卷二、怨憎会苦の条（新大系一〇六頁）にも同様の記事がある。〔本文〕⑭、優婆離尊者は、悉達太子の執事であったが、出家して持律第一の比丘とされた。（『大智度論』卷二）善星比丘は、釈迦の子で、出家して四禪定を得るが、悪心を起こし、無間地獄に墮ちた（『大般涅槃經』南本卷三十三）。『宝物集』では、卷一の宝論の条に、釈迦が虫を殺したように触れ回る話（新大系三十四頁）を載せている。（『法苑珠林』卷三十四を典拠とする。）迦葉尊者は釈迦の弟子で頭陀第一とされた（『增老阿含經』卷二・『法華文句』卷一）。「威儀をと、のえし」の典拠不詳。六軍比丘は、釈迦在世中に常に非威儀のことをしていた六人の悪僧。『僧祇律』卷九・『毘奈耶律』卷十一・『戒因縁經』卷三等に出る。諸経で名が異なるが、難陀・跋難陀・迦留陀夷・闍那・阿說迦・弗那跋の六人を指す。舍利弗は釈迦の弟子中、智慧第一とされる。（『增老阿含經』卷三・『大智度論』卷十一等。）周梨槃特は鈍根であったが、仏の教える一偈を信行し、阿羅漢果を得たという（『止觀輔行伝弘決』卷二一五・『沙石集』卷二一話・『三国伝記』卷八一二五話・『法華経直談抄』卷六本一十九・『直談因縁集』卷四一八等）。また、『法華文句』卷一下・『法華経直談抄』卷第一末一二五話・『直談因縁集』卷一―二十一話等に周梨槃特に姿を変えた迦旃延が外道と論議したという説話がみられる。

〔本文〕⑮、羅睺羅は釈尊成道前の子で、仏十大弟子の一人。『今昔物語集』卷三―三十話に、釈尊が入涅槃の時に、羅睺羅への親愛を示したという話がみえる。（『大悲經』卷二が典拠。『打開集』にも載る。）

〔本文〕⑰は、『法華経』菓草喻品の文。「我觀一切普皆平等無有彼此。愛憎之心我無貪著亦無限礙。」（『大正新脩大藏經』第九卷・二〇c。）

〔本文〕⑱の仏が譬喩經を説いた時に七日間衆生の事を泣き悲しむという話は典拠不詳である。新大系脚注に指摘のあるように、無住の『雜談集』卷四一八「恋故往生事 法華往生事」に「仏譬喩經ヲ説給ニ、七日青蓮ノ御眼ヨリ、涙ヲ流サセ給。阿難故ヲ問。答云。道心ナキ衆生ニ、思ヒワヅラヒタルナリトノ給。」（中世の文学『雜談集』三弥井書店 昭和四十八年）とみえる。

〔本文〕⑳、釈尊が宝海梵志という因位にあつた時に起こした五百大願については『悲華經』卷七、諸菩薩本授記品（『大正新脩大藏經』第三卷・二四c）に説かれる。「爾時宝海梵志在宝藏仏前」（中略）廣大無辺。作五百誓願。復白仏言。世尊若所願不成就不得己利。我則不於未來賢劫重五濁惡。互相鬪諍末世盲痴無所師諮。無有二教戒。隨二於諸見。大暗黒中作二五逆惡。如上説中成二就所願。作中於仏事上。」

次稿においても引き続き卷四の記事の考証を行なっていきたい。（やました・てつろう）

本学博士前期課程修了・本学政治経済学部兼任講師